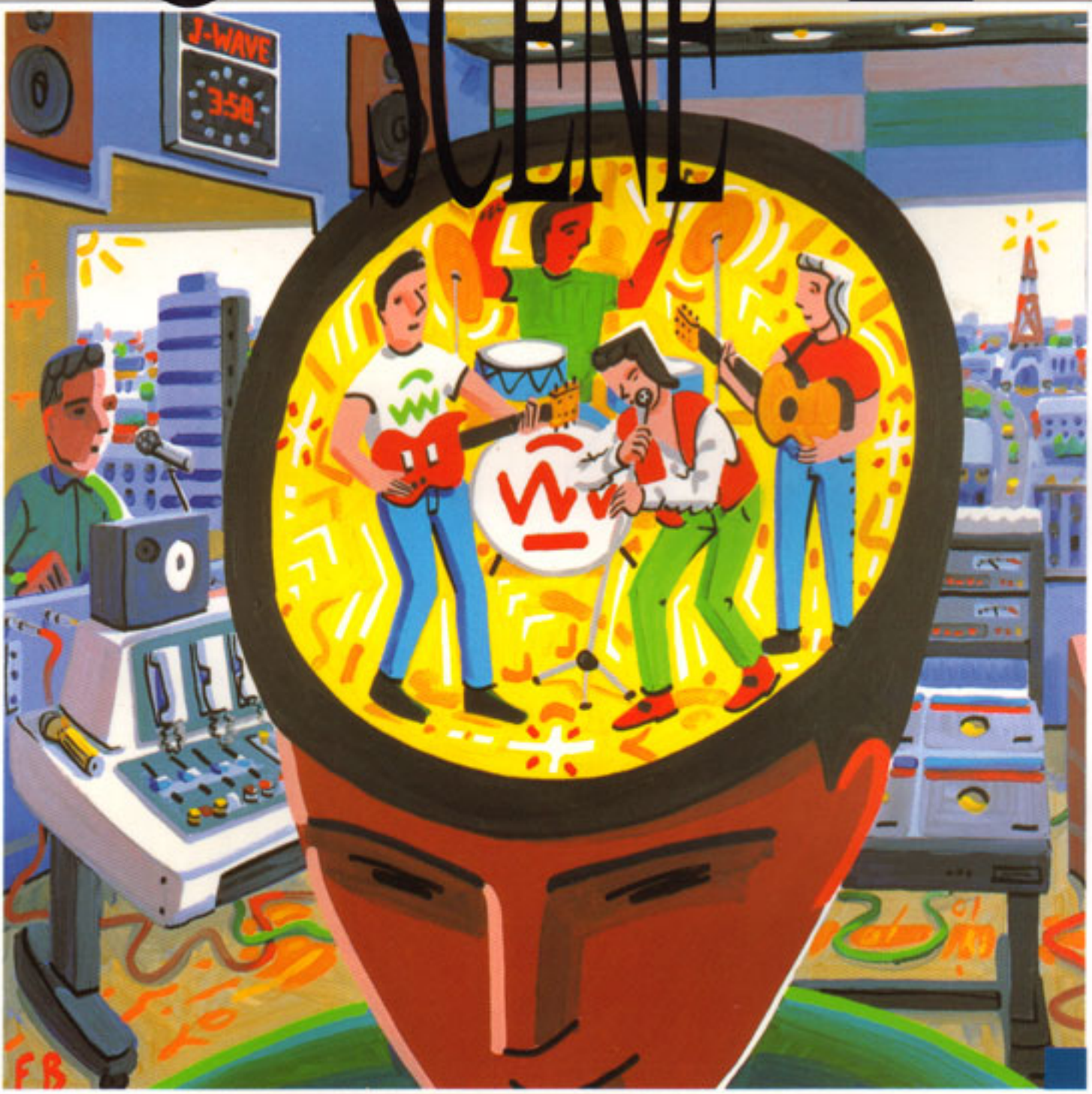
J-WAVE PRESENTS

# メディア世代のカルチャーシーン

## 東京人は何を体験してきたのか

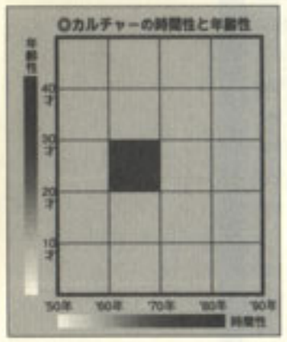
J-WAVE 編

# CULTURE SCENE



# 文化の記憶と再生

## 時間軸から遊離し、人にステイするカルチャー




### ジェネレーションとライフステイジのカルチャー

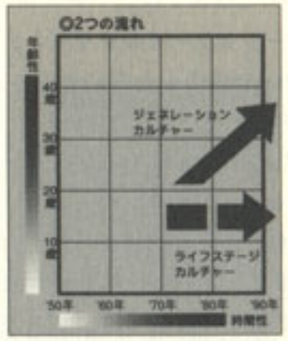
✣ある音楽、あるＴＶ番組、ある雑誌、あるマンガ、ある小説、ある映画は時間の流れの中のある時期に、ある人たちに出会い消費される。さまざまなカルチャーのひとつひとつは特定の時間と特定の層の交点に位置付けられる。そして、特定の交点に位置を得たカルチャーはそれを消費した世代の中に生き続ける「ジェネレーション・カルチャー」となる場合もあるし、あるいはそうした年齢層に受け継がれてゆく「ライフステイジ・カルチャー」となる場合もある。

✣たとえば、今は懐かしい「カレッジ・フォーク」は1968年前後の大学生たちのカルチャーとして存在したし、「クリスタル族」は1980年前後の若者たちを指して使われていた。その後の「新人類」という言葉にもあるように若者たちは時代の折り目のようなところでネーミングされ続けてきた。「若者」という特定のライフステイジのもつカルチャーの新しさは、いつの時代でも注目されている。こうした年齢層によってカルチャーを捉える視点がライフステイジ・カルチャーである。

✣そして、1968年頃を大学生として過ごした人たちは、今「カレッジ・フォーク」を聴くときにある種の懐かしさを感じ、25年位前の自分と自分たち世代のことを思い出すことになるかも知れないし、10年前に大学生だった世代は、自分たちが「クルスタル族」と呼ばれたことに苦々しく感じた当時のことを思い出すことになるかも知れない。「カレッジ・フォーク」の時期に「若者」を過ごした世代、「クリスタル族」とラベルを貼られた世代という視点でカルチャーを捉えるとジェネレーション・カルチャーとなるのである。

✣私たちは1960年代、1970年代、そして1980年代に現れたカルチャーをいろいろな世代がどう体験したのか、そして現在自分たちが通過してきたカルチャーをどう感じているのかを、データを通じて明らかにしようと思い、現在20～24歳、30～34歳、40～44歳の３つの世代を対象にした調査を行った。



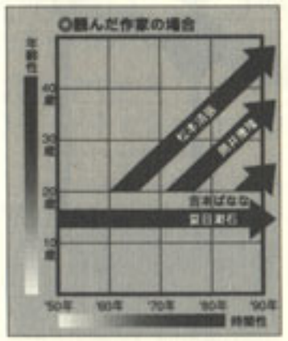



### 世代の視点と年齢層の視点

✣「カレッジ・フォーク」は現在40代の半ばの年齢になる人たちが通過したカルチャーである。こうした特定の世代が特定の時期に通過してきたカルチャーを世代の成長の軌跡として捉えるとあるジェネレーションのカルチャーが浮かびあがってくる。「団塊の世代」とか、「ポスト団塊の世代」「団塊ジュニア」というようなネーミングがあるように「世代」という視点でカルチャーを語ることがよくある。

✣こうしたジェネレーション・カルチャーとは別にライフステイジ・カルチャーとしていくつかの雑誌をあげることができる。「POPEYE」や「Hot·Dog·Press」は高校生の読む雑誌であると言うとき、「POPEYE」や「Hot·Dog·Press」は高校生というライフステイジに達したら読者となり、そして数年後に読者を卒業するということが想定されている。

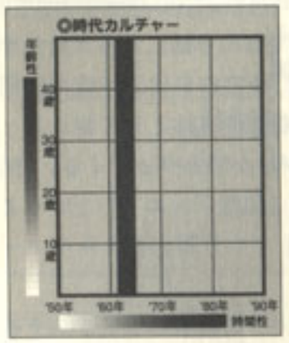
✣かつて「若者文化」とか「サブ・カルチャー」という言葉があった。「大人」が担う「文化」が中心にあり、その周縁に位置する文化を「若者文化」と言ったりした。日本人の誰もが聴いた歌謡曲に対して、大学生の間だけの歌である「カレッジ・ソング」が登場した頃である。そしてこうした若者という特定された年齢層が享受するカルチャーは「サブ・カルチャー」と呼ばれ、いまもそうした言い方がされている。こうした「サブ・カルチャー」や「若者文化」は、ここではライフステイジ・カルチャーのひとつとして捉えることができる。




### 夏目漱石はライフステイジに、松本清張はジェネレーションに

✣例えば、各世代が読んだ本の作家では、夏目漱石もこのライフステイジ・カルチャーのひとつであるようだ。読んだことがある作家として、どの世代にも同じくらいあげられた作家として「夏目漱石」や「芥川龍之介」がある。多分、こうした作家の本は多くの人が中・高校生や大学生などの学生というステイジの時に読んでいるのである。

✣こうした作家に対し、「松本清張」は40～44歳に、「筒井康隆」が30～34歳に、「吉本ばなな」が20～24歳に読んだ作家としてあげられている。それぞれの作家の読者層はそれぞれの作家が最もよく小説を発表していた時期がちょうど20歳前後のライフステイジだったとも言える。世代のステイジと対応しており、結局、いずれの作家も「若者文化」として受け容れられ、その後も「ファン」のような形で、世代の読者をもっていることを推測させてくれる。「松本清張」は40～44歳「筒井康隆」は30～34歳のジェネレーション・カルチャーであり、多分、吉本ばななはいま20～29歳の世代のジェネレーション・カルチャーになることだろう。

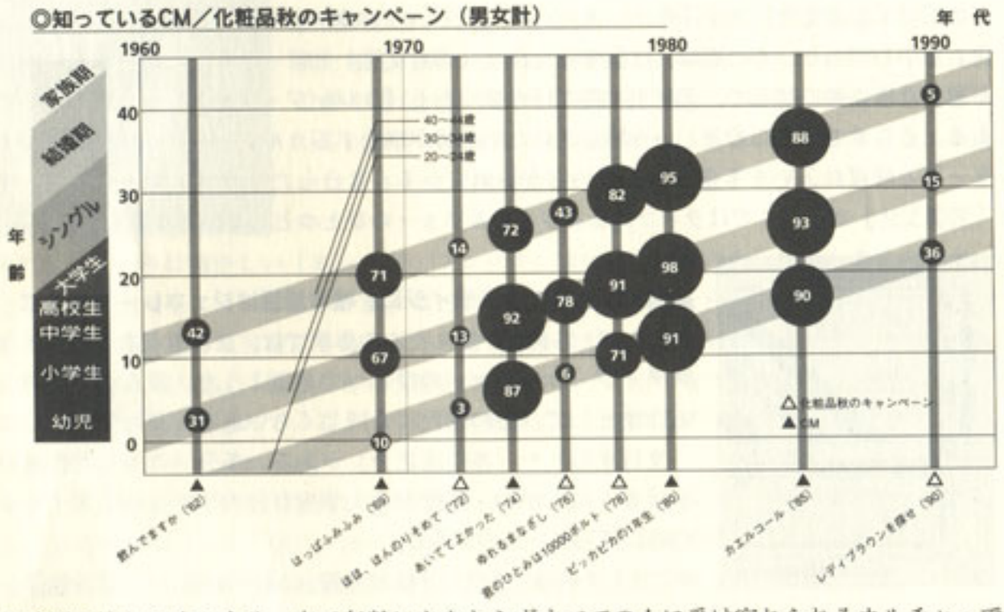



### 時間カルチャーとしてのCM

✣「松本清張」を40～44歳のジェネレーション・カルチャーと言ってしまったが、同じような問いを50～55歳の人たちにすると、40～44歳と同じように「松本清張」があがってくるに違いない。「松本清張」の「砂の器」が書かれたのは1961年であり、ちょうどいま52歳の人が20歳の時のことなるからである。

✣「松本清張」の「砂の器」は出版された時に20代によく読まれたのが、それともももっと幅広い層に読まれたのかはわからないが、吉本ばななが若い人を中心に読まれたのと較べるともっと広い年齢層に読まれたはずである。

✣「砂の器」にこだわるのはやめよう。いままで述べてきた、カルチャーの２つのパターンとは別のもうひとつのパターンがある。




✣時間の流れの中にある一点で年齢にかかわらずすべての人に受け容れられるカルチャーである。その典型はＣＭであり、いくつかのテレビ番組があげられる。

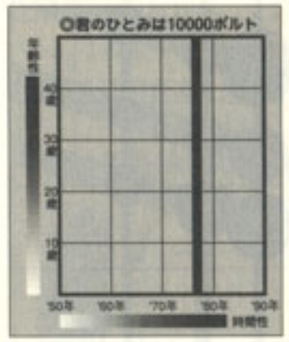
✣例えば大橋巨泉の「はっぱふみふみ」という万年筆のＣＭは1960年のCMだが、このCMを30～34歳、40～44歳の２つの世代の70％前後が20年後の今も覚えているし、翌年の三船敏郎の「男は黙って……」のビールのCMは２つの世代はともに80％以上の人が覚えているが、20～24歳の世代となると30％弱となる。CMが放送されていたのは20～24歳の世代がまだ５歳未満の時期であり、30～34歳の世代は中学生、40～44歳の世代は20代の前半の頃であった。

✣「はっぱふみふみ」も「男は黙って……」も、当時小学生ぐらい以上であったら、多くの人が思い出すことが出来るCMであるのだろう。恐らく、現在50代の人たちも60代の人たちもこのCMを知っているはずである。

✣CMはある程度の年齢になると世代にかかわらず誰もがある時間軸の一点で共通に体験する



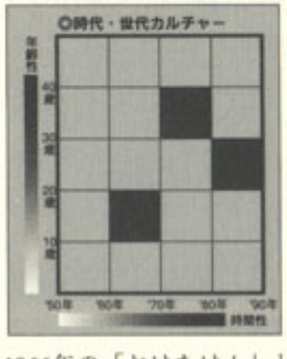
カルチャーなのである。




### 10000ボルトのCMはみんなが記憶している

✣この調査では資生堂の女性化粧品の秋のキャンペーンのキャッチフレーズを取りあげ、覚えているものをあげてもらっている。1966年の「ブラッシュビューティ」から始まって1991年の「たわれなAKAなかなか」までの26年間のキャンペーンのうち、最も多くの人が知っているのは1978年の「君のひとみは10000ボルト」である。20～24歳、30～34歳、40～44歳のどの世代も堀内孝雄が歌を歌ったこのキャンペーンを最もよく覚えている。もちろん、例えば1976年の「ゆれるまなざし」は20～24歳の世代はほとんどの人が知らず、当時ハイティーンだった30～34歳の世代だと過半数が覚えているという違いがあるし、1989年の「レシェンテのラズベリーレッド」や1990年の「レディブラウンを探せ」などここ数年のキャンペーンはターゲットとなっている20～24歳の女性がよく知っているという違いがある。しかし、どの世代の女性も男性も最も多くの人が知っているのは「君の瞳は10000ボルト」であった。このCMは1978年を生きていたすべての日本人の頭の中に焼き付けられ、いまも資生堂のどの秋のキャンペーンよりも多くの人たちに忘れられずに覚えられているのである。

✣CMは多くの場合、それが露出される時間は限定されている。ヤンマーディーゼルの「ヤンボー・マーボー」のCMソングのように長く続いているいくつかのCMがあるが、広告の多くは特定の時代の特定の商品の広告として登場し消えてゆく。そして、そうした広告は世代や性別にかかわらず、多くの日本人に見られ、世代を超えた特定の時間に体験される「時間カルチャー」となっているのである。

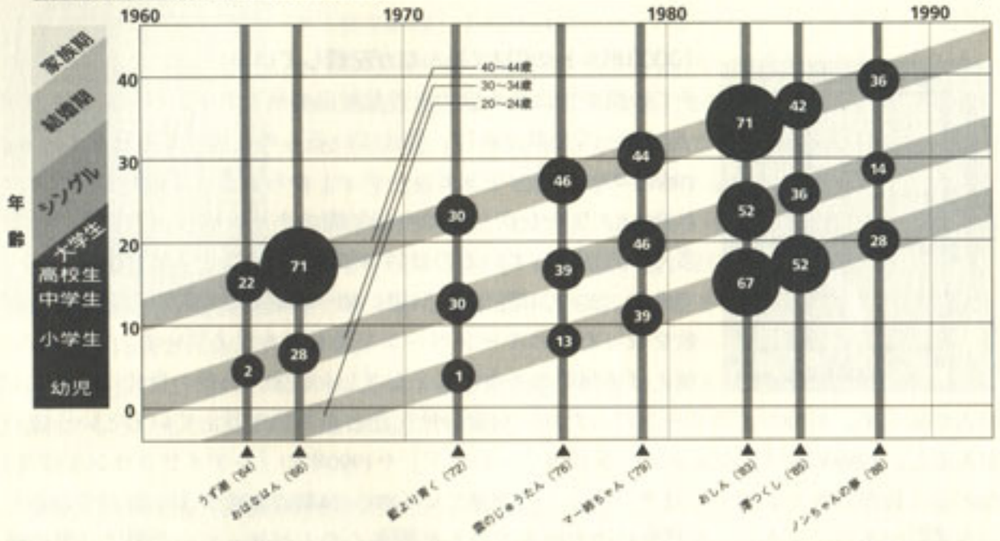



### 時代と世代にあるテレビドラマ

✣CMと同じことがテレビ番組にもあてはまる。たとえばNHKの朝のテレビ小説で、好んで見ていた番組をあげてもらうと、どの世代にも高くあげられたのは「おしん」である。40～44歳の世代は「おしん」と同じように1966年に放送された「おはなはん」をあげる人が多いが、「おはなはん」が放送されていたのは、30～34歳の世代が小学校に入学する前後の頃であり、20～24歳の世代は生まれていないために、この２つの世代にとってNHKの朝のテレビ小説というと「おしん」になるのである。1966年の「おはなはん」と1983年の「おしん」は当時の多くの日本人によく見られた世代を超えたそれぞれの時間に固定されたカルチャーであった。

✣NHKの朝のテレビ小説は見る人の年齢層が幅広い番組である。例えば、テレビドラマでは20～24歳の世代にとって、最も多くの人が見たのは「３年B組金八先生」である。「金八先生」は1979年に放送されており、20～24歳の世代が小学生の頃になる。そして、この金八先生は当時20歳前後だった30～34歳の世代や30歳前後だった40～44歳の世代にはそれほど見ら

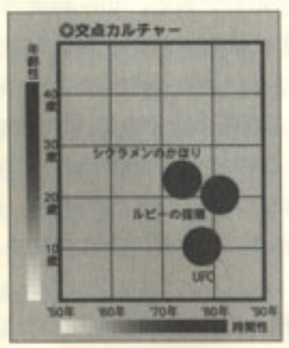
◎好んで見た朝のテレビ小説（女性）




れていない。

✣30～34歳だと「３年B組金八先生」よりも「時間ですよ」や「寺内貫太郎一家」が多くの人にあげられる。「金八先生」は1970年、「寺内貫太郎一家」は1974年に放送されており、30～34歳の世代が小学生か中学生の頃に見たドラマである。テレビドラマを始めて熱心に見たのが、小学生や中学生の頃で、こうしたライフステイジの時期に見たドラマは広く心に残っていることが推測される。

✣この２つの世代が共通してよく見たドラマは、1983年に放送された「ふぞろいの林檎たち」になる。20～24歳の世代が10代前年で30～34歳の世代が20代前半の時期、同じドラマを見ることになるのである。70年代のドラマが親と子どもに見られたとしたら、80年代のドラマは若者たちと子どもに見られたと言えるのかも知れない。「ふぞろいの林檎たち」と同じようにその後「男女７人夏物語」もこの２つの世代が見ることとなった。




### シクラメンの世代とルビーの世代

✣朝のテレビ小説は年齢や世代に偏りなく幅広い層に見られているが、多くのテレビドラマはある層に偏って見られることがあり、必ずしも時間カルチャーとはならない。

✣そして、同じようなことが多くのヒット曲と言われる音楽にもあてはまる。例えば、それをレコード大賞の曲に見てみる。

✣1959年の「黒い花びら」から、1991年の「愛は勝つ」「北の大地」までの34曲の中から好んで聴いたことがある曲を選んでもらうと、40～44歳の世代は「シクラメンのかほり」であり、30～34歳の世代は「ルビーの指環」をあげ、20～24歳の世代は「UFO」と「ミ・アモーレ」をあげる。

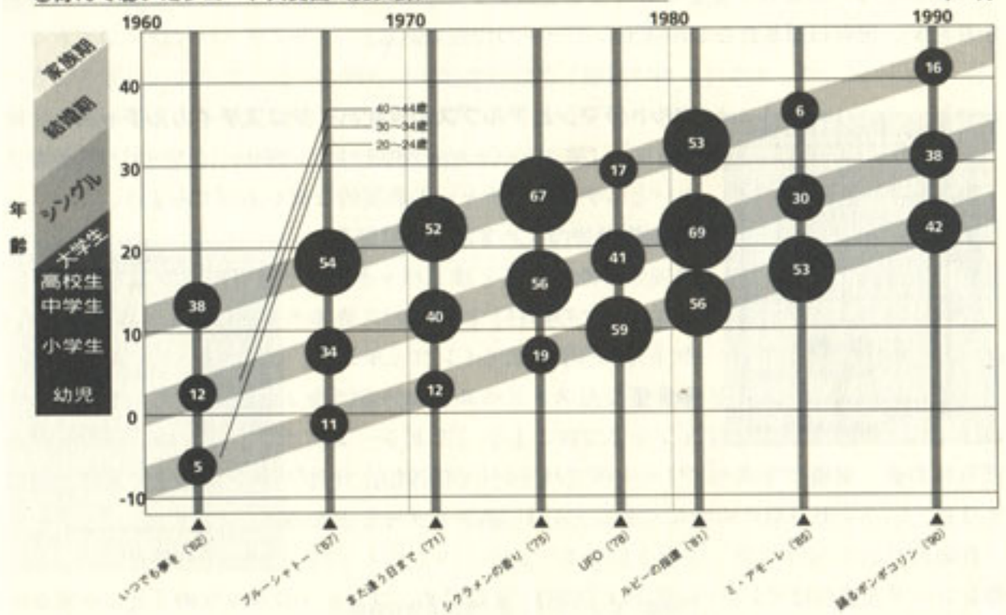
✣40～44歳の世代にとっては20代前半の頃に聴いた「シクラメンのかほり」（1975年）が自分たちの世代が共通して体験した曲であり、30～34歳の世代にとっては20歳の前後の時期の

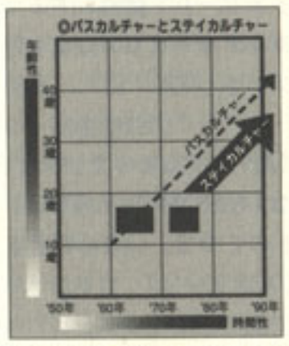


「ルビーの指環」（1981年）であり、20～24歳の世代にとっては、10歳前後の時に聴いた「UFO」（1978年）とハイティーンの時期の「ミ・アモーレ」となるのである。

✣それぞれの世代は、それぞれのライフステイジのある時期に好んでよく聴いた曲をもっている。このように歌謡曲は特定の時間に特定の世代に偏って聴かれる時間と世代の交点に重心を置く「交点カルチャー」といっていいのだろう。

◎好んで聴いたレコード大賞曲（男女計）




### パスカルチャーとステイカルチャー

✣この国の多くのカルチャーはこれまで、ある時点で体験し、時間の流れとともに脱ぎ捨てられてゆくことが多かった。例えば、これまでみてきたCMやテレビドラマのように多くの日本人やある世代の共通体験となったカルチャーは、時間の刻印を押されてその時代に留まり、人は時間の流れとともにそのカルチャーから出てゆき、次の新しいカルチャーを消費してゆくことが多かった。

✣こうした通過するカルチャーでそれぞれの世代が世代に固有な共通体験をもつものの典型的な例がアイドルである。

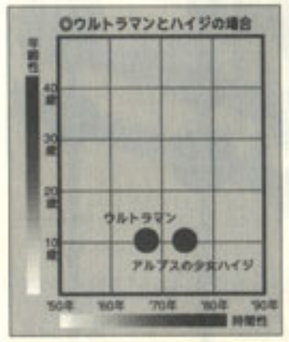
✣40～44代だと「ザ・ピーナッツ」や「舟木一夫」そして「ブルー・コメッツ」があり、30～34歳だと「グレープ」「アリス」「太田裕美」「キャンティーズ」らがいるし、そして20～24歳だと「ピンク・レディ」や「少年隊」、「シブガキ隊」があげられることになる。

✣さて、私たちは、この調査でそれぞれの世代がどういうカルチャーを好んで享受してきたかという問いと同時に、同じカルチャーについて現在も好きかどうかをたずねている。各世代がライフヒストリーのある時期に熱中したカルチャーは現在どういう意味をもっているの

か。今は懐かしさだけで好きでないカルチャーと現在も好きなカルチャーを区別しようとしたのである。

✣そして通過してきただけで今は好きでないカルチャーを「パスカルチャー」と呼び、いまも好きなカルチャーを「ステイカルチャー」として、さまざまなカルチャーを捉え直してみたいと思う。

✣さきにみたアイドルの場合は今も歌いつづけている小泉今日子や中森明菜を除くとどれもパスカルチャーになる。なかでも「ピンク・レディ」と「キャンディーズ」は多くの人に聴かれたが、現在は好まれないパスカルチャーの代表である。




### ウルトラマンとアルプスの少女ハイジはステイカルチャー

✣さて、ここでいくつかの領域のカルチャーについてパスカルチャーとステイカルチャーの典型的な例をあげてみよう。

〔映画〕

●ステイカルチャーは「バック・トゥ・ザー・フューチャー」と「ローマの休日」。逆にパスカルチャーは「エマニエル夫人」や「タワーリング・インフェルノ」。

●俳優ならステイカルチャーは「トム・クルーズ」や「ダスティン・ホフマン」、「ケビン・コスナー」などの「現役」があげられるが、女優は「オードリー・ヘプバーン」が圧倒的。ヘプバーンは永遠であり、逆にオリビア・ハッセーやテイタム・オニールはパスカルチャーとなる。

〔音楽〕

●レコード大賞曲はピンク・レディの「UFO」をはじめ、ブルー・コメッツの「ブルー・シャトー」などパスカルチャーが中心であり、時代とともに好まれなくなる曲が多い。

●レコード大賞曲と比べると、「イエスタデイ」「レット・イット・ビー」を始めとするビートルズの曲や「卒業写真」に代表されるユーミンの曲はステイカルチャーとしていまも好まれている。

〔CM〕

●CMはほとんどがパスカルチャーである。とくにセブン－イレブンの「開いててよかった」やNTTの「カエルコール」は多くの人に覚えられているが、いま好きなCMにはあまりあげられない。

●逆に「ピッカピカの一年生」や「もっとはじっこ歩きなさいよ」の2つは、いまも好きな人が多く、CMの中では数少ないステイカルチャーとなっている。

〔テレビ番組〕

●CMと同じ時間カルチャーである朝のテレビ小説は「おしん」を始め、「マー姉ちゃん」「おはなはん」など、いまも好きという人が多く、ステイカルチャーとなることが多い。

●テレビドラマは「ふぞろいの林檎たち」を始め、「101回目のプロポーズ」「北の国から」などはステイカルチャーであるが、一方で「時間ですよ」「肝っ玉かあさん」などは懐かしさだけのパスカルチャーと言える。

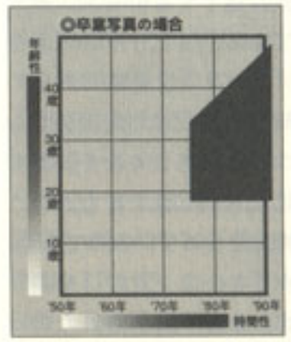
●ウルトラマンシリーズだと、「ウルトラマン」「ウルトラセブン」がステイカルチャーであり、「ウルトラマンレオ」はどちらかというとパスカルチャー。また、アニメ番組では「アルプスの少女ハイジ」が多くの人のステイカルチャーとなっている。

〔その他〕

●「巨人の星」「あしたジョー」は同じ位の人に見られたが、現在も好きという人は「あしたのジョー」に多く、「巨人の星」は少ない。「あしたのジョー」はステイカルチャーとなるが、「巨人の星」はパスカルチャーである。

●ベストセラー本である小松左京の「首都消失」、青島幸男「人間万事塞翁が丙午」や山岡荘八の「徳川家康」、有吉佐和子「恍惚の人」は、多くの人が読んでいるが、いま「好き」という人は少ないパスカルチャーになる。ベストセラーはCMのように時間の中だけで生きていることが多いようで、唯一の例外は司馬遼太郎の「龍馬がゆく」であった。

●アミューズメント施設では「東京ディズニーランド」がステイカルチャーとなり、街では「横浜」や「鎌倉」、「銀座」がステイカルチャーで、逆に「原宿」はパスカルチャーになる。




### 「卒業写真」はすべての世代の曲である

✣歌手・ミュージシャンの中で多くの人に聴かれ、現在も好きな歌手・ミュージシャンにあげられているのは「桑田佳祐」、「ユーミン」、それに「ビートルズ」である。20～24歳と30～34歳の世代は「ユーミン」と「桑田佳祐」を、40～44歳の世代は「ビートルズ」をより好んでという世代差はあるが、いずれの世代もこの3人を好きな歌手の上位にあげており、世代を超えて好まれている歌手・ミュージシャンであると言える。また、聴く人はこの3人ほど多くはないが、現在も好まれて聴かれている歌手・ミュージシャンに40～44歳の世代が中心の「井上陽水」、20～24歳と30～34歳に好まれる「小田和正」、「山下達郎」それに20～24歳の世代の「チューブ」や、どの世代の女性にも好まれる「ダイアナ・ロス」がいる。

✣ところで、「ビートルズ」や「ユーミン」がどの世代にも好んで聴かれ、いまも好まれているステイカルチャーであるのは、歌手・ミュージシャンとして時代の変化に対応し、時代に合う曲を送り出してきたためではないと言える。もし、そ

◎現在好きな歌手・ミュージシャン（男性）

| | 男性 20～24歳 | 男性 30～34歳 | 男性 40～44歳 |
|---|---|---|---|
| 1 | 桑田佳祐 | 桑田佳祐 | ビートルズ |
| 2 | ビートルズ | ユーミン | 井上陽水 |
| 3 | ユーミン | ビートルズ | 谷村新司 |
| 4 | チューブ | 井上陽水 | サイモン＆ガーファンクル |
| 5 | 小田和正 | 山下達郎 | 桑田佳祐 |
| 6 | 山下達郎 | 小田和正 | カーペンターズ |
| 7 | ボン・ジョビ | サイモン＆ガーファンクル | ユーミン |
| 8 | マイケル・ジャクソン | スティービー・ワンダー | 加山雄三 |
| 9 | 井上陽水 | 山口百恵 | 山口百恵 |
| 10 | ローリング・ストーンズ | 谷村新司 | 小田和正 |

◎現在好きな歌手・ミュージシャン（女性）

| | 女性 20～24歳 | 女性 30～34歳 | 女性 40～44歳 |
|---|---|---|---|
| 1 | 桑田佳祐 | ユーミン | ビートルズ |
| 2 | ユーミン | 桑田佳祐 | 谷村新司 |
| 3 | ビートルズ | 山下達郎 | 井上陽水 |
| 4 | 山下達郎 | 小田和正 | サイモン＆ガーファンクル |
| 5 | 小田和正 | 井上陽水 | 桑田佳祐 |
| 6 | 松田聖子 | ビートルズ | 小田和正 |
| 7 | ダイアナ・ロス | 山口百恵 | ユーミン |
| 8 | チューブ | チューブ | 中島みゆき |
| 9 | 大江千里 | 谷村新司 | カーペンターズ |
| 10 | MCハマー | ダイアナ・ロス | ダイアナ・ロス |

◎現在好きなビートルズの曲（男性）

| | 男性 20〜24歳 | 男性 30〜34歳 | 男性 40〜44歳 |
|---|---|---|---|
| 1 | イエスタデイ | イエスタデイ | イエスタデイ |
| 2 | レット・イット・ビー | レット・イット・ビー | レット・イット・ビー |
| 3 | ヘルプ！ | ゲット・バック | ヘルプ！ |
| 4 | プリーズ・プリーズ・ミー | ヘルプ！ | アンド・アイ・ラヴ・ハー |
| 5 | イエロー・サブマリン | オール・マイ・ラヴィング | プリーズ・プリーズ・ミー |
| 6 | ツイスト・アンド・シャウト | 抱きしめたい | ゲット・バック |
| 7 | ゲット・バック | ア・ハード・デイズ・ナイト | 抱きしめたい |
| 8 | ミスター・ムーンライト | イエロー・サブマリン | オール・マイ・ラヴィング |
| 9 | 抱きしめたい | カム・トゥゲザー | プリーズ・ミスター・ポストマン |
| 10 | ア・ハード・デイズ・ナイト | キャント・バイ・ミー・ラヴ | イエロー・サブマリン |

◎現在好きなビートルズの曲（女性）

| | 女性 20〜24歳 | 女性 30〜34歳 | 女性 40〜44歳 |
|---|---|---|---|
| 1 | レット・イット・ビー | イエスタデイ | イエスタデイ |
| 2 | イエスタデイ | レット・イット・ビー | レット・イット・ビー |
| 3 | ヘルプ！ | ヘルプ！ | 抱きしめたい |
| 4 | プリーズ・プリーズ・ミー | ゲット・バック | ヘルプ！ |
| 5 | ラヴ・ミー・ドゥー | プリーズ・ミスター・ポストマン | イエロー・サブマリン |
| 6 | 抱きしめたい | 抱きしめたい | プリーズ・プリーズ・ミー |
| 7 | ミスター・ムーンライト | イエロー・サブマリン | プリーズ・ミスター・ポストマン |
| 8 | イエロー・サブマリン | オヴ・ラ・ディ・オヴ・ラ・ダ | ミスター・ムーンライト |
| 9 | オヴ・ラ・ディ・オヴ・ラ・ダ | ラヴ・ミー・ドゥー | ア・ハード・デイズ・ナイト |
| 10 | ツイスト・アンド・シャウト | アンド・アイ・ラヴ・ハー | アンド・アイ・ラヴ・ハー |

◎現在好きなユーミンの曲（男性）

| | 男性 20〜24歳 | 男性 30〜34歳 | 男性 40〜44歳 |
|---|---|---|---|
| 1 | 卒業写真 | 卒業写真 | 卒業写真 |
| 2 | 中央フリーウェイ | 中央フリーウェイ | 中央フリーウェイ |
| 3 | サーフ天国、スキー天国 | あの日に帰りたい | あの日に帰りたい |
| 4 | ノー・サイド | ルージュの伝言 | ルージュの伝言 |
| 5 | あの日に帰りたい | 冷たい雨 | やさしさに包まれたなら |
| 6 | ルージュの伝言 | やさしさに包まれたなら | 冷たい雨 |
| 7 | やさしさに包まれたなら | 少しだけ片想い | 少しだけ片想い |
| 8 | ふってあげる | サーフ天国、スキー天国 | ノー・サイド |
| 9 | メトロポリスの片隅で | ノー・サイド | 避暑地の出来事 |
| 10 | ロッヂで待つクリスマス | ロッヂで待つクリスマス | 心のまま |

◎現在好きなユーミンの曲（女性）

| | 女性 20〜24歳 | 女性 30〜34歳 | 女性 40〜44歳 |
|---|---|---|---|
| 1 | 卒業写真 | 卒業写真 | 卒業写真 |
| 2 | ノー・サイド | あの日に帰りたい | あの日に帰りたい |
| 3 | サーフ天国、スキー天国 | 中央フリーウェイ | ルージュの伝言 |
| 4 | 中央フリーウェイ | 冷たい雨 | 中央フリーウェイ |
| 5 | あの日に帰りたい | ルージュの伝言 | 冷たい雨 |
| 6 | やさしさに包まれたなら | やさしさに包まれたなら | やさしさに包まれたなら |
| 7 | ルージュの伝言 | 少しだけ片想い | 少しだけ片想い |
| 8 | ガールフレンズ | サーフ天国、スキー天国 | ノー・サイド |
| 9 | メトロポリスの片隅で | ノー・サイド | サーフ天国、スキー天国 |
| 10 | 真珠のピアス | 真珠のピアス | 心のまま |

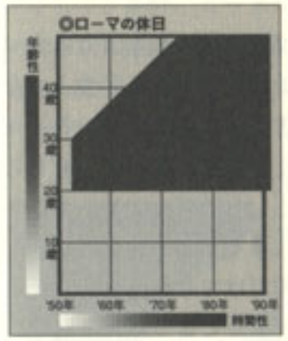
れぞれの時代に対応した曲を送り出しているとしたら、世代によって好む曲が違ってくるはずである。ところが例えば「ビートルズ」の曲だとどの世代も「イエスタデイ」と「レット・イット・ビー」を好きな曲にあげるし、「ユーミン」の曲なら第一位が「卒業写真」であり、次に「中央フリーウェイ」があげられる。世代は違っても好む曲は同じである。「ビートルズ」や「ユーミン」の曲は特定の時代と世代に対応関係をもつことはあまりなく、どの世代も同じ曲を好むという傾向をもっているのである。

✣「ユーミン」の「卒業写真」がリリースされたのは1975年である。この時40〜44の世代は20代の半ば、20〜24歳の世代は3歳〜7歳くらいである。多分、「卒業写真」は20歳ぐらいの時に高校の「卒業写真」を懐かしくみるという状況設定であり、既に40〜44歳の世代が、そこに自分を重ね合わせるにはぎりぎりの年齢であり、20〜24歳の世代は15年後の今がその年齢になるのである。

✣多分、30〜34の世代が「卒業写真」世代に近くなるが、どの世代も同じ「卒業写真」を好んでいるのである。このことは「卒業写真」が、特定の時代の特定の世代の曲ではなく、時間を超えたステイカルチャーになっていることを示していると言える。



✣20〜24歳、30〜34歳、40〜44歳というそれぞれの10歳のへだたりをもつ年を生きている世代が、「ビートルズ」の「イエスタディ」を好み、「ユーミン」の「卒業写真」を好んでいる。




### 世代を超えて好まれる「ローマの休日」

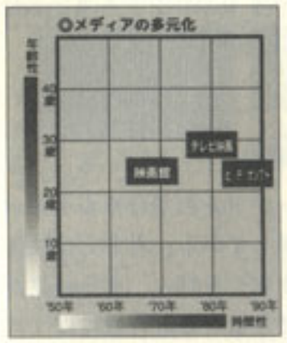
✣「社会的判断力批判」という副題がつけられたピエール・ブルデューの「ディスタンクシオン」は、フランスではカルチャーの好みが階級によって違うことを実証している。たとえば映画では、商工業経営者は「史上最大の作戦」を好み、自分の見た映画の監督名と俳優名を話すことができる中等教育教授はブニュエルの「皆殺しの天使」とか、フランチェス・ロージの「シシリーの黒い霧」を好むと分析している。

✣このブルデューの分析を待つまでもなく、フランスやイギリスの人たちのカルチャーの好みは階級によって説明されることが多いが、この国のカルチャーの好みは世代で説明されていることが多かったはずだ。時代が変化し、次々と生まれるカルチャーが消費されてゆく時、そのカルチャーが消費された時間が重要である。70年代に20代を過ごした世代と80年代に20代を過ごした世代とでは体験するカルチャーが異なり、異なった嗜好をもつようになることが多い。カルチャーを規定するほどの「階級」は日本にはなく、「世代」が「階級」のような役割を果たしていたのである。しかし、「ユーミン」の「卒業写真」が20代を70年代、80年代、そして90年代という時代に過ごす異なった世代に好まれている。「世代」でカルチャーの嗜好を説明するのが難しくなってきているのである。そしていま、世代を超えたカルチャーがいくつか生まれてきていると言える。

✣例えば、各世代の女性があげた好きな映画を見ると、どの世代でも上位にあげられている映画に「ローマの休日」と「バック・トゥー・ザ・フューチャー」がある。20〜24歳の女性が「ゴースト」を好み、40〜44歳の女性が「卒業」を好んでいるのは、彼女たちの世代性を表しているが、「ローマの休日」は40〜44歳の世代だけが好む映画ではなく、20〜24歳の女性にも好まれているのである。

◎現在好きな映画（女性）

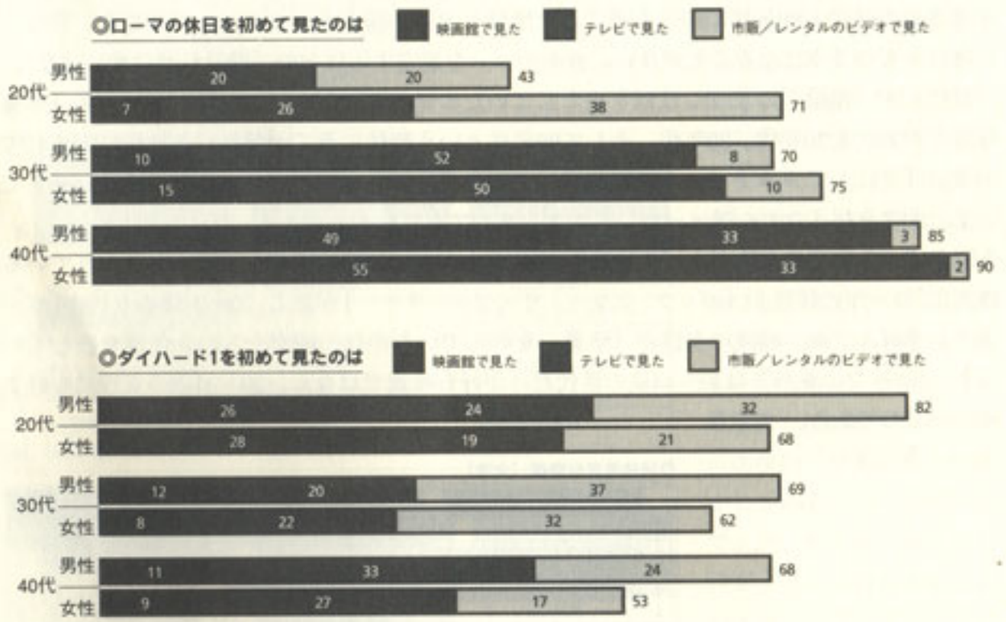
| | 女性 20〜24歳 | 女性 30〜34歳 | 女性 40〜44歳 |
|---|---|---|---|
| 1 | ゴースト | バック・トゥ・ザ・フューチャー | ローマの休日 |
| 2 | バック・トゥ・ザ・フューチャー | E・T | 卒業 |
| 3 | ローマの休日 | ローマの休日 | サウンド・オブ・ミュージック |
| 4 | プリティー・ウーマン | ターミネーター | 太陽がいっぱい |
| 5 | ターミネーター | ダイハード | バック・トゥ・ザ・フューチャー |
| 6 | ダイハード | クレーマー・クレーマー | E・T |
| 7 | E・T | 卒業 | クレーマー・クレーマー |
| 8 | サウンド・オブ・ミュージック | プリティ・ウーマン | ネバーエンディングストーリー |
| 9 | ネバーエンディングストーリー | サウンド・オブ・ミュージック | ターミネーター |
| 10 | クレーマー・クレーマー | ゴースト | カサブランカ |




### カルチャーのメディアは多元化している

✣20～24歳の女性も「ローマの休日」を好むという現象をもたらしたのは言うまでもなく、ビデオ・ソフトという新しい映画のメディアの登場にある。

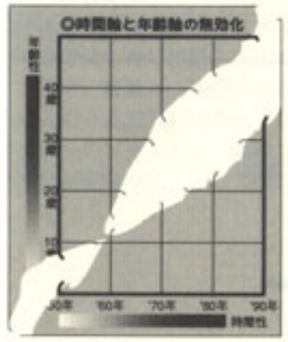
✣「ローマの休日」をみたことがある女性は20～24歳よりも30～34歳に多く、30～34歳よりも40～44歳に多い。しかし、20～24歳の女性も71％が「ローマの休日」を見ており、このカルチャーを体験した人の多さは世代によって大きな違いはない。もちろん20～24歳の女性はレンタルを中心にしたビデオソフトでこの映画を初めて見ていて、30～34歳の世代の女性はテレビが圧倒的に多く、40～44歳になると映画館で「ローマの休日」を初めて見ているのである。もし映画館だけでしか見られなかったら、「ローマの休日」は40～44歳とそれ以上の世代のカルチャーにとどまっただろうが、映画は映画館だけでなく、テレビで放送され、レンタルビデオで見られるという多様なチャンネルをもつのである。




✣映画というひとつのカルチャーがさまざまなチャンネルを通じて各世代にとどけられる。「ローマの休日」とは逆に「ダイハード・Ⅰ」20～24歳はほぼ映画館で見ているが、30代はレンタルビデオで見、20代はテレビでみるという現象もある。多様なチャンネルはそれぞれの世代に同じカルチャーをとどける役割を果たし、世代に限定されないカルチャーをつくり出すのである。

✣「ローマの休日」は1953年に映画公開されたが、こうした時代の刻印は「ローマの休日」がビデオソフトになることによって、1950年代のカルチャーではなく、時代を超えたカルチャーとして生き続けることを可能にした。だからいま、あの映画の中のオードリー・ヘプバーンは、どの世代にも限定されない世代共通のステイカルチャーとして語られることになり、どこで見たかという話題が世代を表すだけになるのである。

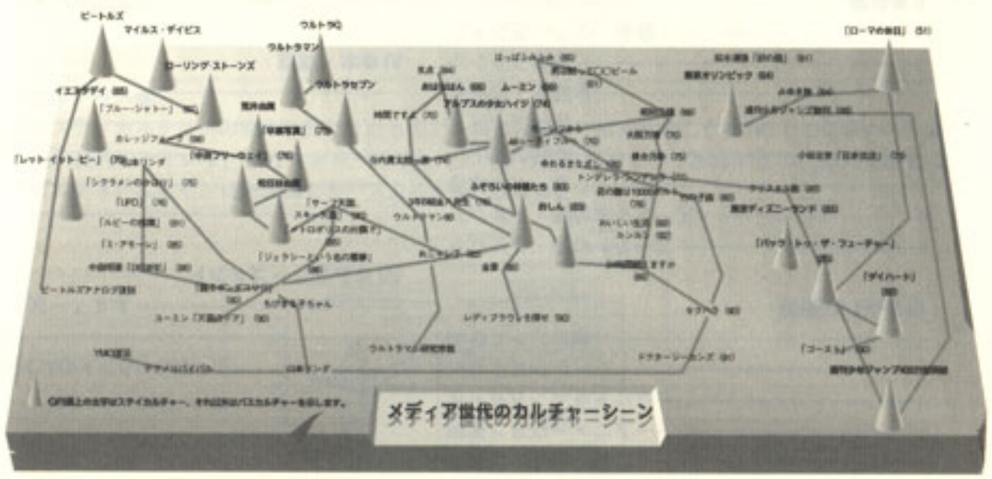
✣そして、多分、ビートルズやユーミンの曲が幅広い世代に好まれるステイカルチャーになったの要因のひとつに音楽のソースがレコード、CD、ラジオ、テープなどに多様化していることも影響しているだろう。ビートルズの全集がCD化されることによって、これまでビートルズのLPを持たなかった世代がCDを買うという現象が起きたはずである。




### 「定番カルチャー」が生まれつつある

✣ひとつのカルチャーが時間から自由になり、いつの時代でも幅広い世代に享受されるカルチャーとなる。こうしたカルチャーの超時間化・超世代化はマス・カルチャーの「定番化」としても捉えられることができる。「ローマの休日」や「イエスタデイ」や「卒業写真」はいわば「定番カルチャー」なのである。そして今、こうしたカルチャーの選別がメディアの多元化によって、通過してきたカルチャーのリサイクルをともないながら、促進され始めていると考えることができる。

✣これまで、あまりにも多くのカルチャーが消費され、時間の流れるままに過去のものとなってしまっていた。しかし、こうした中で人々の身体や頭の中にストックされているカルチャーも無数にある。ある時代、あるいはある世代、もしくはある国のカルチャーとして「現在」からは忘れられがちなものがステイカルチャーとして、今という時間の中によみがえり、さまざまな「定番カルチャー」が生まれ始めている。世代や年齢や性別でカルチャーが語られる時代は終わりつつあるのである。



# 新しいファンを再生する映画

映画には名作と呼ばれるものは多いが「ローマの休日」や「カサブランカ」などは時が過ぎても新しいファンを作り続けている代表的な映画といえる。
ここでとり上げた幾つかの映画の中でも「ローマの休日」と「カサブランカ」はステイカルチャー性の高い映画となっている。
かって、映画はロードショーの上映が行われると、しばらくの間は見ることが出来なかった。しかし現在の映画はロードショーでの上映、名画館での上映、テレビでの放映、ビデオでの販売やレンタルなど幾つもの経路から接することが出来るメディアとなっている。
ロードショーで見なくとも、数年後にビデオを買って見る、というような出会いも可能なメディアとなっている。書籍などはベストセラーになったとしても数年後には、手に入りにくい本となってしまっていることが多いが、映画の場合はこれまでのストックをビデオ・ソフトにしていたりするため、むしろ古いものの方が手に入りやすいことが多い。
こうした傾向のためか、映画は他分野と較べて、パスカルチャー・ゾーンにあるものは少ない。パスカルチャー・ゾーンで目立っているのは「オーメン」や「エマニエル夫人」くらいなものとなっている。ステイカルチャー・ゾーンにある映画では先の二作や「卒業」「サウンド・オブ・ミュージック」「スティング」という名作に加えて「バック・トゥ・ザ・フューチャー」「E・T」「スターウォーズ」といったスティーブン・スピルバーグの作品が多い。スピルバーグの作品は年齢や性別を越えて楽しめる作品が多いが、長く愛される映画としての性格も兼ね備えているようである。

●〈卒業〉（1967年アメリカ）
監督：マイク・ニコルズ
大学出のお坊っちゃん青年ダスティン・ホフマンが、アン・バンクロフトおばさまに誘惑されて情事を重ねるうちに、娘のキャサリン・ロスと本気で恋に落ちてしまう…。教会から花嫁を奪って逃げるラスト・シーンは、青春映画のバイブルとしてあまりにも有名。サイモン&ガーファンクルのテーマ曲「サウンド・オブ・サイレンス」も映画と共に大ヒットした。

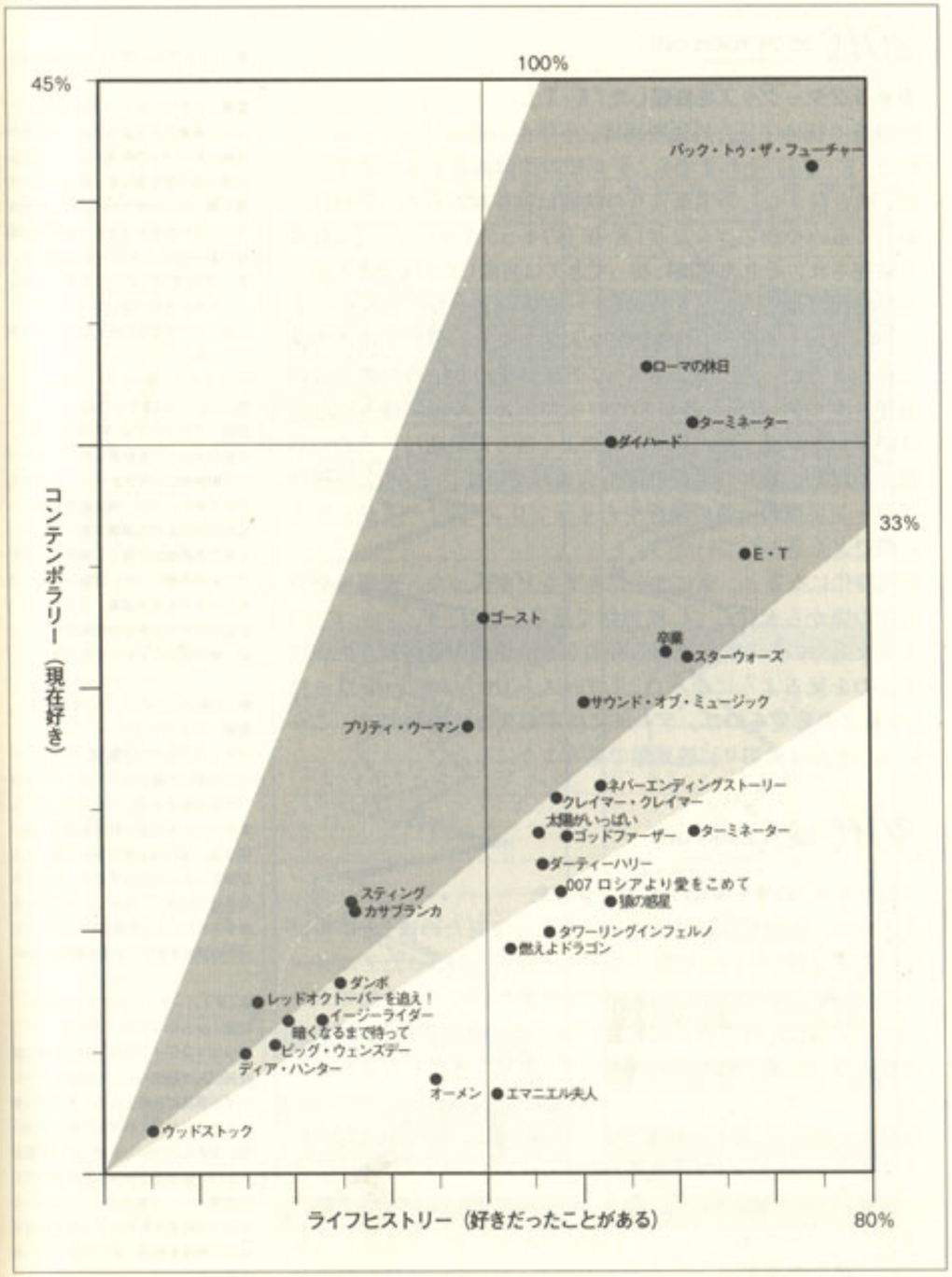
●〈スティング〉（1974年アメリカ）
監督：ジョージ・ロイ・ヒル
ポール・ニューマンとロバート・レッドフォードの詐欺師コンビが、仲間を殺された復讐に、ギャングの大ボス相手に一世一代のイカサマを仕掛けるという娯楽映画の傑作。軽妙かつスリリングな展開、そして観客もア然とするラストの大逆転劇など、文句なしに面白い。マーピン・ハムリッシュによる「スティングのテーマ」もお馴染みである。

●〈スターウォーズ〉（1977年アメリカ）
監督：ジョージ・ルーカス
シリーズ第3作まで作られたSF超大作。SFXを駆使したド迫力の空中戦闘シーンが観客を圧倒。悪の権化ダースベーダー、共和国軍を助けるルークやハン・ソロの他、C-3POやR2-D2といったロボットまで、出てくるキャラクターも秀逸揃い。SF活劇の中に、友情・恋愛・若者の成長といったテーマも盛り込まれており、大人のファンも多い。

●〈ディア・ハンター〉（1978年アメリカ）
監督：マイケル・チミノ
故郷ペンシルバニアで鹿狩りに興じていたロバート・デニーロ、クリストファー・ウォーケン、ジョン・サベージの3人の若者が、ベトナム戦争によって人生を狂わせていく様を描いた反戦映画の秀作。実弾によるロシアン・ルーレットという拷問刑のシーンが、ベトナム戦争の狂気を象徴。アカデミー作品賞、監督賞など、数々の賞を受賞している。







## 20代 20-24 YEARS OLD

### キャラクターグッズを自慢した「E・T」

映画館で初めて見た外国映画は、小学生の頃にロードショーされた「E・T」。それまでも、テレビの洋画劇場でよく見ていたが、吹き替えなしの字幕入りの映画は初体験だった。当時は、ぬいぐるみや消しゴムなど「E・T」のキャラクターグッズも数多く発売され、それを学校に持ってきては自慢したのも懐かしい。

中学時代には、同じSF物の「ターミネーター」や「バック・トゥ・ザ・フューチャー」が爆発的な人気となり、学校ではその話で持ちきりだった。レンタル・ビデオが流行り始めたのもこの頃で、カウチ・ポテト族なんていってレンタル屋に通うこと自体がオシャレだった。レンタルでよく借りた映画は、当時の話題作のほか、往年の名作映画も含まれていて、オードリー・ヘプバーン主演の一連の映画やチャップリン・シリーズが友だちの間でよく見られていた。

高校時代になると、家にケーブルテレビが入った。映画の見方はこの頃から変化して、映画館で見るものは「ダイハード」のような迫力のある映像で迫るものなど、映画の雰囲気を生かせるものを見るようになった。「ゴースト」や「プリティ・ウーマン」などの恋愛ものは、デートには不可欠な映画なので、こういった映画は封切りに映画館で見るようにした。

## 30代 30-34 YEARS OLD

### 「ロッキー」のテーマでジョギングした

小さい頃、映画館に連れていってもらって見たのは「カエルになった王子様」や「101匹ワンちゃん大集合」といったアニメーション。小、中学校では、学校の体育館や街の文化会館のスクリーンで全校一斉の映画鑑賞会があって、そこで「アラビアのロレンス」や「明日に向かって撃て！」を見て感動した事を覚えている。

高校生になると、友だち同士でよく映画を見に行くようになり、ダスティン・ホフマンの「卒業」やジェームス・ディーンの「エデンの東」などを名画座で見た。スポーツ・アクションものでは、ブルース・リーや007シリーズも人気があったが、何と言ってもこの時代で爆発的ヒットとなったのが「ロッキー」だった。第

●〈ゴッドファーザー〉（1972年アメリカ）
監督：フランシス・F・コッポラ
シシリーからアメリカに渡り一大勢力を築いたマフィアのファミリー、コルレオーネ家を通して、マフィアの内幕を暴いたコッポラの代表作。壮絶なマフィアの抗争ドラマと圧倒的な映像美で数々のアカデミー賞に輝いている。1作目でマーロン・ブランドからドンの地位を受け継いだアル・パチーノが、PART IIIでは引退するドン役を演じている。

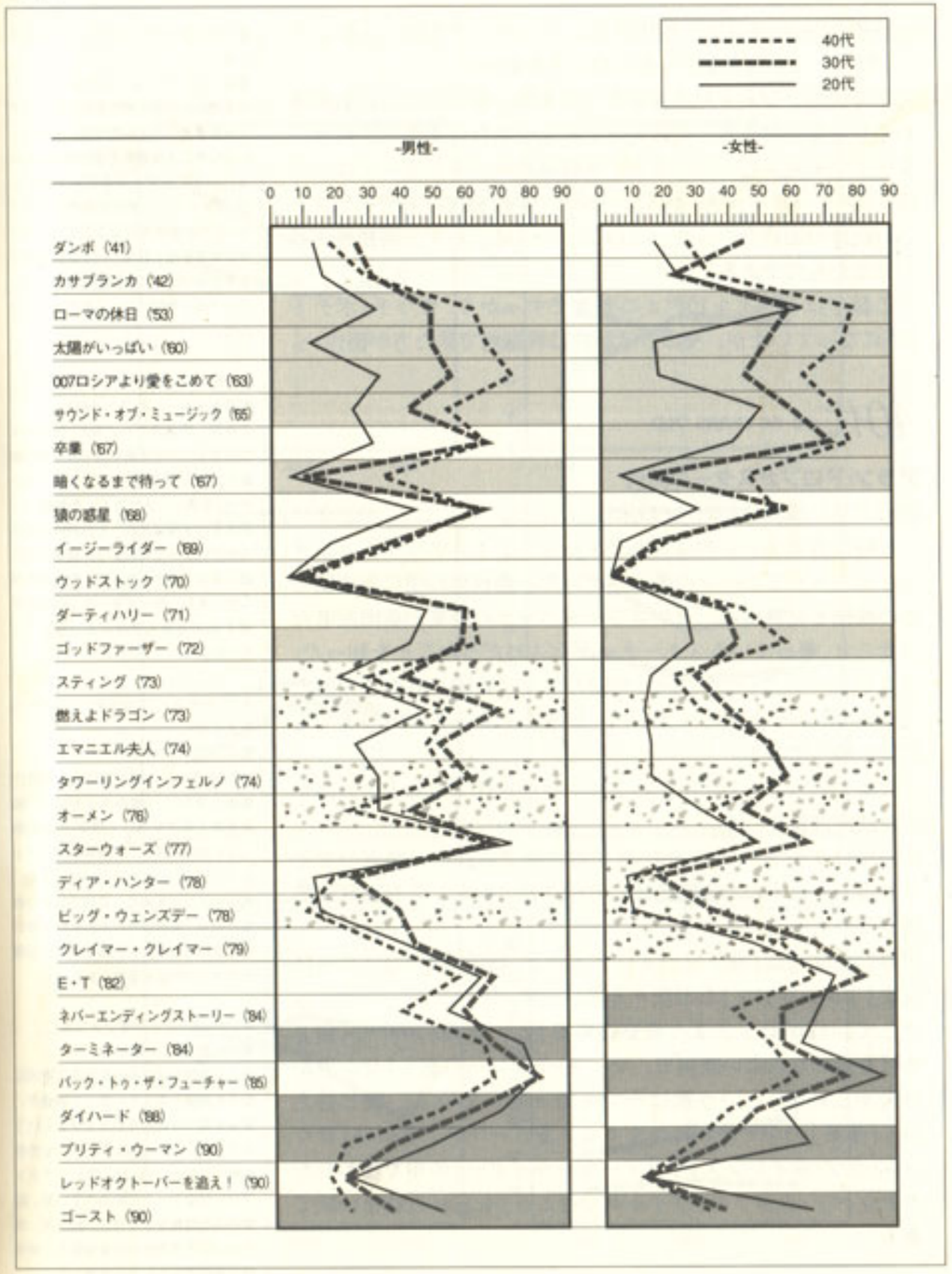
●〈E・T〉（1982年アメリカ）
監督：スティーブン・スピルバーグ
世界的大ヒットを記録した、スピルバーグ製作のSFファンタジー。宇宙からやってきたE・Tが、地球の子どもたちに助けられながら無事宇宙に帰っていくまでを感動的に描く。最初はグロテスクに見えるE・Tが、最後は可愛く思えてしまうから不思議。ラスト、E・Tとエリオット少年との別れのシーンでは、映画館中にすすり泣きが漏れた。

●〈太陽がいっぱい〉（1960年仏＝伊）
監督：ルネ・クレマン
名匠ルネ・クレマンが監督、アラン・ドロン主演の一級サスペンス。ブルジョワの放蕩息子を殺して貧乏から成り上がろうとした若者の野望を描く。真っ青な海、強烈な太陽の輝きの中、殺人が発覚したとも知らず安らかにまどろむ若者の横顔…。痛々しいまでに鮮烈なラストシーンが印象深い。ニーノ・ロータの哀愁あるテーマ曲も有名である。

●〈ダイハード〉（1988年アメリカ）
監督：ジョン・マクティアナン
クリスマス・イブの夜、地上50階の超高層ビルが最新ハイテク武装したテロリスト集団に占拠される。そこにたまたま居合せた一人の刑事が孤立無援の戦いを挑むアクション超大作。高層ビルという設定を生かした斬新かつ迫力の戦闘シーンが見もの。ブルース・ウィリスが弱音を吐きながらもくたばらない刑事役を熱演、新しいヒーロー像を築いた。







一作のヒットでシリーズ化され、ジョギングの時に「ロッキー」のテーマを聴きながら走ったこともあった。
大学時代は、ぴあを見て池袋や三軒茶屋、飯田橋などの名画座めぐりに出かけたり、気に入った特集があれば4本立てのオールナイトも見に行った。また、当時見たロードショーでは、やはり「スターウォーズ」がスケールといい、SFXの素晴らしさといい抜群の面白さだった。このシリーズは、必ず公開初日に並んで見たものである。
ここ数年はレンタルビデオの普及ですっかり“カウチ・ポテト族”になっていたが、やはり話題作は映画館で見た方が面白い。

## 40代 40-44 YEARS OLD

### アラン・ドロンがスターの時代

初めて見た洋画は「ローマの休日」だった。
この時に覚えているのはスクーターと、アイスクリームと、オードリー・ヘプバーンの美しさだった。高校生の頃に名画座でこの映画を見直して、グレゴリー・ペックの職業が新聞記者だったこと、乗っているスクーターがベスパだったことを知った。ラストシーンで「今まで回った国の中でどの国が最も印象的だったか」という質問にヘプバーンが応えるシーンがいつまでも印象に残っている。
「太陽がいっぱい」のアラン・ドロンは同世代で最も人気の高かった映画俳優だった。
あの頃はアラン・ドロンが出演する映画であれば、映画のタイトルはどんなものでも魅力的に宣伝されていた。監督よりも俳優が輝いていたように思う。
ドロンの映画は「地下室のメロディー」「冒険者たち」「さらば友よ」「シシリアン」など次々と思い出す。
そして、「007ロシアより愛をこめて」という007シリーズ第2作目も忘れられない映画で、マット・モンローの歌う「ロシアから愛をこめて」という歌は今でも時々聴いている。歌と言えば、「卒業」の中で使われたサイモン&ガーファンクルの「サウンド・オブ・サイレンス」や「イージーライダー」の中で使われたステッペン・ウルフの「ワイルドで行こう」も忘れられない歌である。

●〈プリティ・ウーマン〉(1990年アメリカ)
監督：ゲーリー・マーシャル
一週間という恋人契約を結んだリッチな実業家としがない売春婦。しかし、いつしか二人は本気で恋に落ち…という、いかにもアメリカ的なシンデレラ・ストーリー。実業家役のリチャード・ギアと娼婦役のジュリア・ロバーツがはまり役で好演。バラの花を持ったギアがロバーツを迎えに行くラストシーンが、女性のハートをがっちり掴んだ。

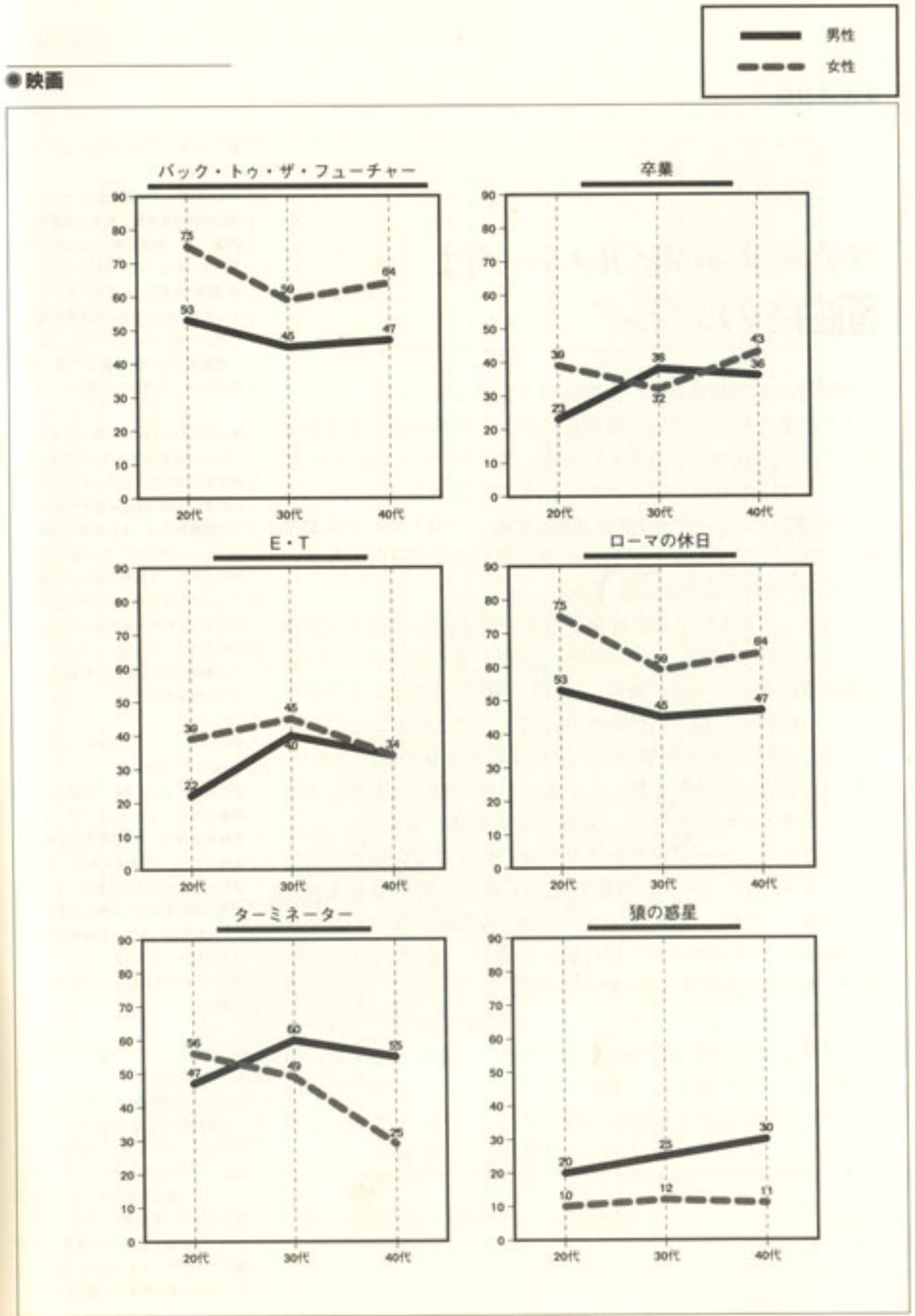
●〈ターミネーター〉(1984年アメリカ)
監督：ジェームス・キャメロン
ご存知、肉体派アーノルド・シュワルツェネッガーが未来からやってきた鋼鉄不死身の殺人マシーン「ターミネーター」を演じて大ヒットした話題作。肉体を吹き飛ばされ、その鋼鉄の骨組みだけになっても執ように獲物を追い続けるターミネーターに、観客は戦慄した。また、ターミネーターの生態を描くSFXや壮絶なアクションも際立っていた。

●〈クレイマー・クレイマー〉(1979年アメリカ)
監督：ロバート・ベントン
結婚8年目にして突然妻に去られた仕事漬けの夫が、7歳の息子を抱えて悪戦苦闘する姿を通して親子・夫婦のあり方を問いた秀作。夫婦役のダスティン・ホフマンとメリル・ストリープが、裁判で子どもをめぐって対立し傷つきながらも、最後は子どもの幸せを願い心を通わせるラストが泣かせた。当時のアメリカ社会を反映した作品。

●〈ゴースト〉(1990年アメリカ)
監督：ジェリー・ザッカー
恋人と共同生活を始めた矢先に暴漢に殺され幽霊となってしまった若者が、犯人を見つけ恋人を必死で守るというラブ・ストーリー。幽霊となった若者を描くSFXシーンなど、美しくファンタジックなシーンにあふれている。最愛の人と別れていく悲しい結末が、女性のみならず男性の心をも捉え、全世界で驚異的な大ヒットを放った。







●ビートルズの曲・アルバム

# 曲もアルバムも強い「ビートルズ」

1960年代にイギリスが生んだロック・グループ「ビートルズ」の主要なアルバムと曲は、そのどれもがステイカルチャー・ゾーンに位置している。ステイカルチャー・ゾーンの中で最もステイ度が高い曲は「イエスタデイ」であり、次いで「レット・イット・ビー」「ヘルプ」「プリーズ・プリーズ・ミー」「抱きしめたい」「ゲット・バック」などお馴染みの曲が続いている。また、アルバムでは「レット・イット・ビー」が最もステイ度が高く、次いで「ヘルプ」「プリーズ・プリーズ・ミー」が目立っている。

その他の曲やアルバムも「好きだった」「現在好き」という好意の高さは「レット・イット・ビー」の曲やアルバムには及ばないもののいずれも、ステイカルチャー・ゾーンに集中している。

曲とアルバムのどちらが、より好かれているかを見ると、ビートルズの場合、ステイカルチャー・ゾーンの上位に位置しているのはアルバムよりも、ひとつひとつの曲である場合が目立っている。

上記の三枚のアルバムを除くと「ア・ハード・デイズ・ナイト」、「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」「ザ・ビートルズ・ホワイト・アルバム」「リボルバー」などいずれも同じ位置におり、ステイカルチャー・ゾーンにおけるアルバムのバラつきはあまり見られない。

● 〈PLEASE PLEASE ME〉（1963年）
ビートルズのファースト・アルバム。収録曲は、デビュー曲「ラブ・ミー・ドゥ」をはじめ、「プリーズ・プリーズ・ミー」「ツイスト・アンド・シャウト」他、全14曲。このアルバムは、発売後7週間で、ヒットチャートの1位となり、以後29週もの間、首位の座を守り続けた。これは、英国のチャート史上、最長の記録となっている。

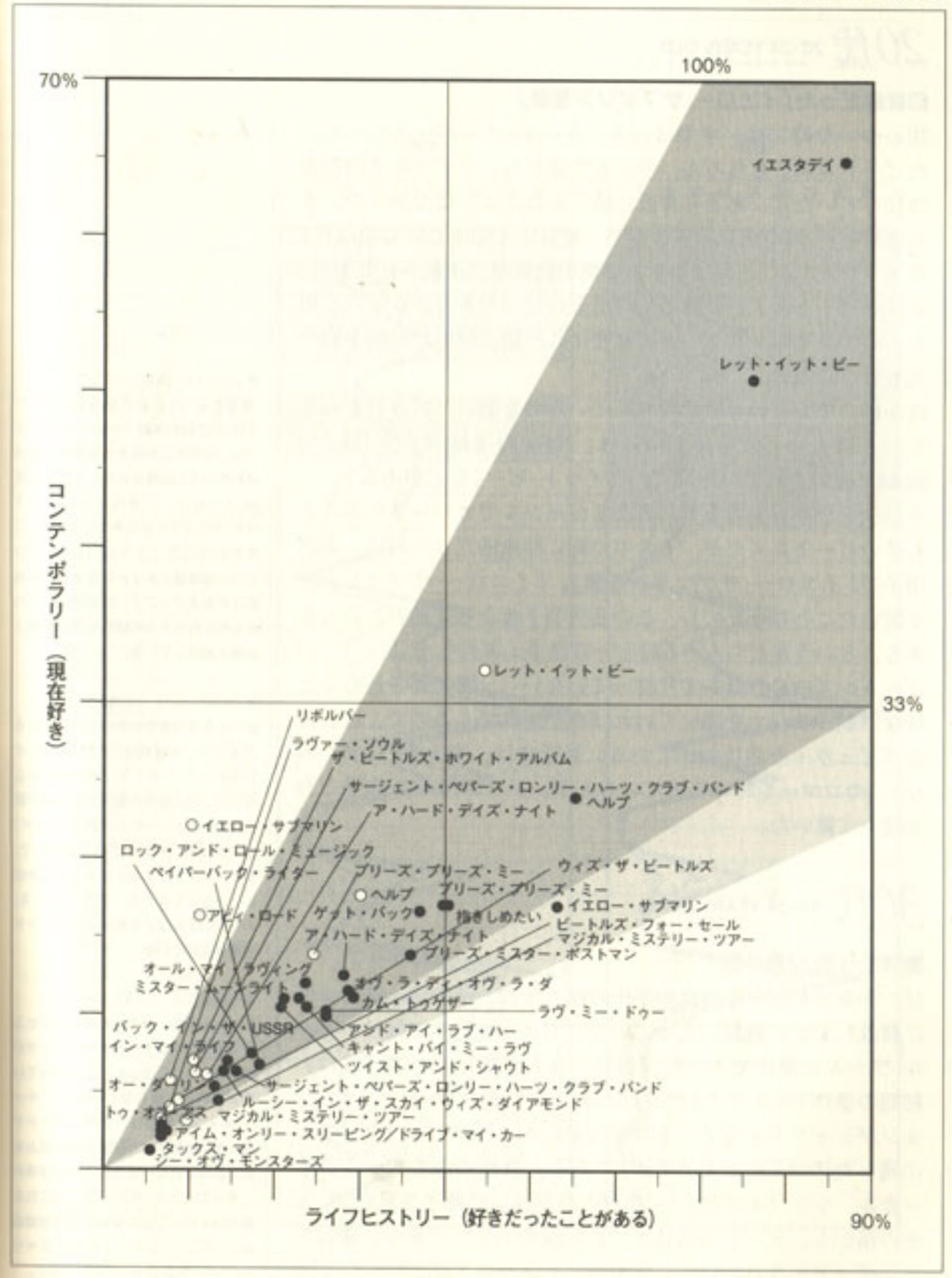
● 〈WITH THE BEATLES〉（1963年）
発売5日後に、アルバム・チャートに1位で登場。それまで29週にわたり首位を守っていた「プリーズ・プリーズ・ミー」に取って替った2枚目のアルバム。その後、このアルバムも21週間、No.1をキープ。ビートルズは、トータルで50週も首位を独占した。収録曲は、「プリーズ・ミスター・ポストマン」「抱きしめたい」「のっぽのサリー」など。アメリカでは、64年の1月に収録曲を変えて発売され、2カ月間365万枚を売り上げた。

● 〈A HARD DAY'S NIGHT〉（1964年）
映画「ビートルズがやって来る・ヤァ！ヤァ！ヤァ！」とタイアップしたアルバムとして、撮影と並行して制作された。映画の中枢をなすシーンで使用された「キャント・バイ・ミー・ラブ」を始め、「ア・ハード・デイズ・ナイト」「アイ・フィール・ファイン」他15曲が収録されている。また、このアルバムは、レノンとマッカートニーのオリジナルのみをフィーチャーした唯一の作品となっている。



●ビートルズの曲・アルバム

○アルバム ●シングル



## 20代 20-24 YEARS OLD

### 印象的だった「イエロー・サブマリン音頭」

物心ついた時には、すでにスタンダード・ナンバーとなっていたビートルズ。もちろん、子どもの頃から、ビートルズの存在は知っていたが、あまり身近に感じられたことはなかった。そんなビートルズ・ナンバーの中で、最もよく知っている曲は「イエスタデイ」。この曲は中学の音楽の教科書に掲載されており、それがビートルズとの初めての出会いだった人も多かった。また、ピアノやエレクトーンの練習にこの曲を弾いた経験を持つ人も少なくない。

ほかに、テレビの番組で使われているのを聴いて好きになったという者もいて、そんな例には、NHKの連続ドラマ「妹」でBGMに使用されていた「レット・イット・ビー」などがある。

クラシックやジャズなど、異なるジャンルでカバーされることも多いビートルズだが、その中で特に印象的だったのは、金沢明子の「イエロー・サブマリン音頭」。「イエロー・サブマリン」を聴いたことはなくても、この金沢明子版ならば聴いたことがある、という友だちもいるほど一時はよく耳にした。

ビートルズのCDはあまり持っていないし、特に聞き込むことはないが、ラジオを聴いていれば曲が流れてくるので、ほとんどポピュラーな曲は知っている。最近では、資生堂の「ダンガリー」のコマーシャルに出ている人が、ジョン・レノンの子どもと聞いて驚いた。

## 30代 30-34 YEARS OLD

### 衝撃だった12月8日

ビートルズを知ったのは中学生の時だった。その頃、彼らは既に解散してソロ活動に入っていて、ちょうど日本ではリバイバル・ブームの最中であった。当時、友人と買ったレコードは、初期の傑作「ヘルプ！」だった。タイトル曲の「ヘルプ！」もジョンがシャウトするイントロが印象的だったが、やはり一番心に残ったのは「イエスタデイ」である。哀愁のあるポールのボーカル、シンプルで美しいメロディ・ラインに魅了された。

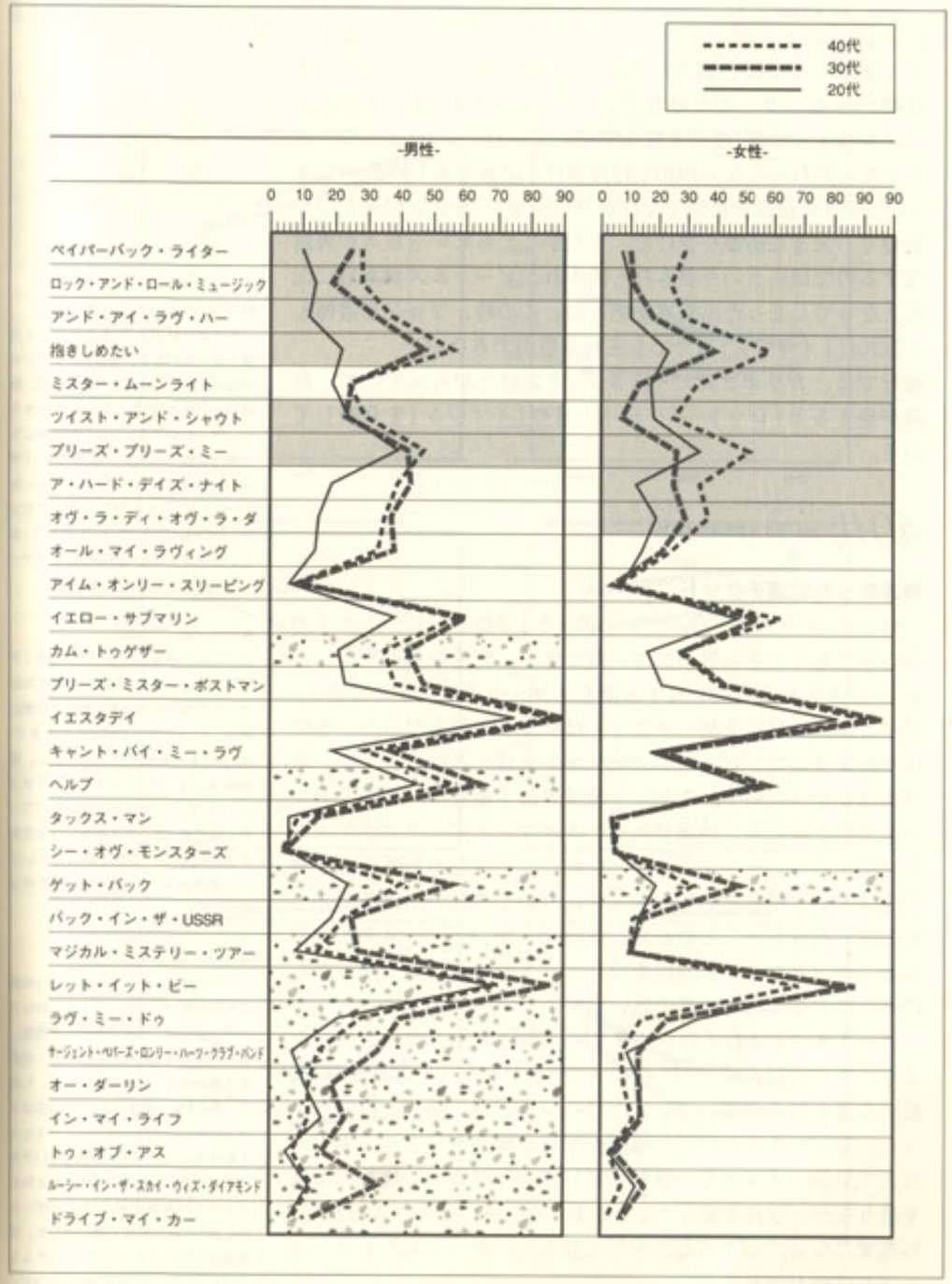
その頃から、ビートルズはすでに伝説のバンドであり、曲はスタンダードとなっていて、学校のブラスバンド部が「ヘイ・ジュ

● 〈HELP！〉（1965年）
5枚目となったこのアルバムは、その半分が3作目の映画「HELP！4人はアイドル」のために作曲されたもので構成されている。収録されている主な曲目は、「ヘルプ！」「チケット・トゥ・ライド」そして「イエスタデイ」など。このアルバムは、ビートルズにとってひとつの過渡期にあり、これまでの延長線上にあるアップテンポな曲と、これから先に見られる実験的な要素を持った曲が混在している。

● 〈RUBBER SOUL〉（1965年）
ビートルズの傑作のひとつと評されるアルバム。収録曲は「ノウホエア・マン」「イン・マイ・ライフ」「ミッシェル」。そして、村上春樹の著作で近年再び脚光を浴びた「ノーウェジアン・ウッド」他、全14曲。彼らは、このアルバムで、革新的なポップミュージックを生み出し、さらにシタール、ファズ・ベース、ハーモニウムなどを取り入れサウンドの幅も広げている。

● 〈REVOLVER〉（1966年）
ビートルズのソングライティングとスタジオレコーディングのテクニックが新たなピークに達した、といわれているアルバム。彼らはこの中で、テープ・ループや逆回し、ブラスバンドや潜水艦の効果音などさまざまな試みを取り入れており、こうした試みは次の「サージェント・ペパーズ・…」に引き継がれていくことになる。主な収録曲は、「ペニー・レイン」「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」など。

● ビートルズの曲



ード」や「レット・イット・ビー」「イエロー・サブマリン」などをよく演奏していた。個人的には、ロックンロール・ナンバーより聴かせるバラードが好きで、「ミッシェル」や「ジュリア」「ノルウェイの森」などを好んで聴いていた。
そして、忘れもしない1980年12月8日。アルバム「ダブル・ファンタジー」で活動を再開したばかりのジョン・レノンの死という悲報で、大きな衝撃を受けた。もしかしたらビートルズが再結成するのでは…という夢も打ち砕かれ、ビートルズが本当に伝説となってしまった出来事であった。この時、ジョンを追悼して流れた「イマジン」は今でも忘れる事ができない。
最近では、カラオケにビートルズ・ナンバーが入っていて、仲間が集まると「レット・イット・ビー」や「イマジン」を合唱している。

## 40代 40-44 YEARS OLD

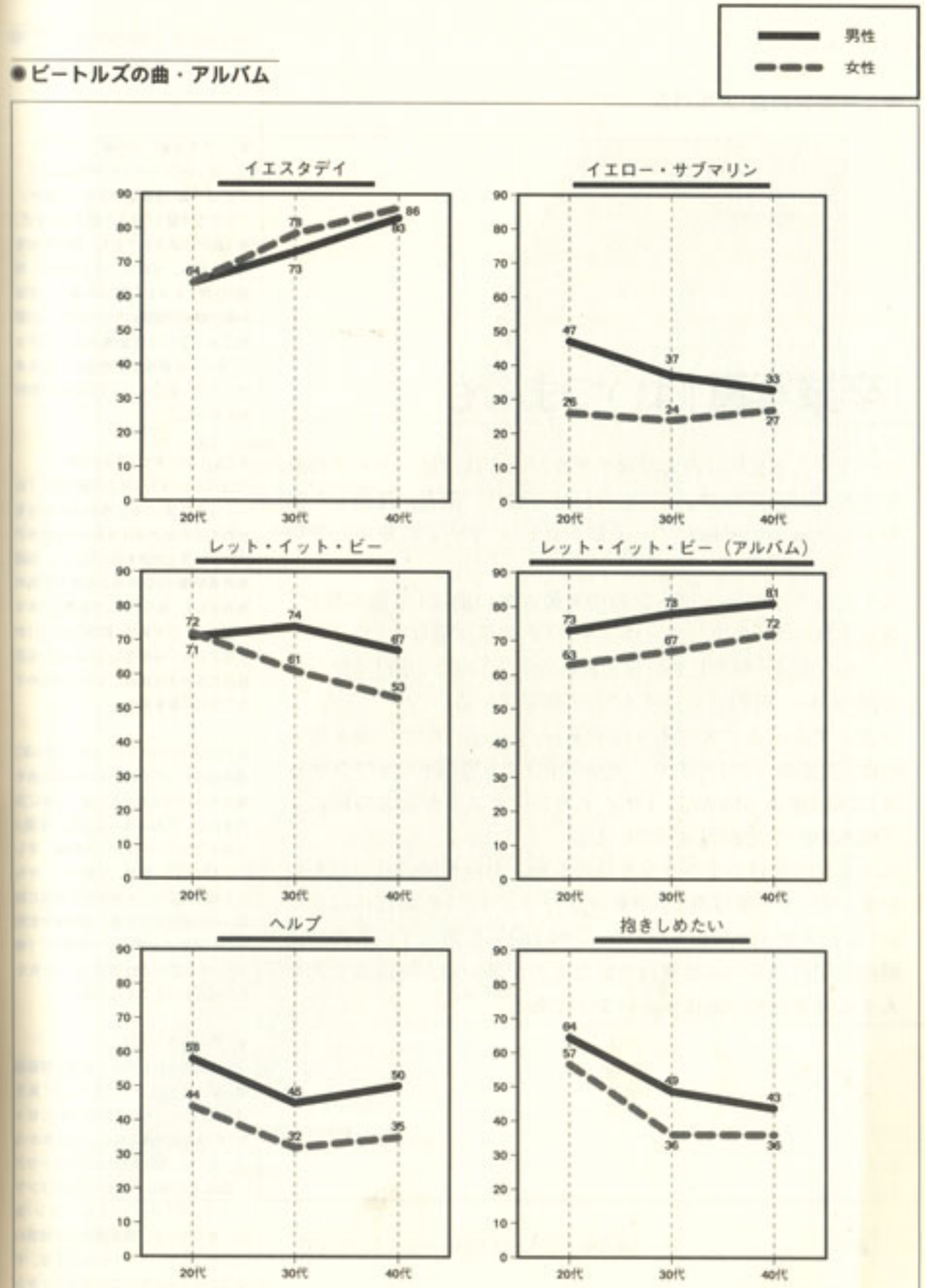
### 抽選だった公演チケット

「ロック・アンド・ロール・ミュージック」は数あるビートルズの曲の中でもことさら思い出深い曲である。何故かと言えば、ジョン・レノンがこの曲で日本公演をスタートさせたからである。ビートルズの日本公演のチケットはプラチナ以上だった。当時は今のようにコンピュータでチケットを買うというようなシステムはなかったので、チケット希望者は主催者にハガキでチケット予約を申込み、抽選で当った人がプレイガイドでチケットと交換するというシステムがとられた。当然ながら外れたので公演はテレビで見た。ビートルズについての思い出は音楽としての思い出もさることながら、洋服だとか、ヘアースタイルだとか、インドだとか、映像やジャケットの写真、女王陛下からの勲章など音楽以外の事で思い出すことが多い。
「ビートルズ」は若者のライフスタイルに大きく関与していたように思う。例えば「アビィ・ロード」のジャケット写真などは、横断歩道を四人が歩いているだけの写真だが、随分と格好良かった。見ているうちに同じ構図の写真が撮りたくなり、友だち五人で早朝の人気のない横断歩道に出かけて行き、順番に歩道を渡りながら写真を撮ったことがあった。その中の一人は結局、写真家になってしまった。そして社会人になってからもビートルズとは縁が切れない。

● 〈SGT.PEPPER'S〉(1967年)
60年代後半のポップ・カルチャーを代表するアルバムで、そのサイケデリックなジャケットはあまりにも有名。当時のミュージック・シーンはもちろん、アートやファッションの分野にも大きな影響を与えた。収録曲は、「サージェント・ペパーズ・…」「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンド」「オール・ユー・ニード・イズ・ラブ」など。全体が、まさにひとつのコンサートを思わせる構成となっている。

● 〈LET IT BE〉(1970年)
ビートルズ最後のアルバム。前作「アビィ・ロード」よりも先に制作されたが、その当時彼らは既に最悪の状態にあり、レコーディングから発売まで1年3カ月もの時間がかかっている。収録曲は、「レット・イット・ビー」「ゲット・バック」「ジョンとヨーコのバラード」など全14曲。アメリカでは発売前の予約だけで370万枚を数え、米レコード業界始まって以来の記録を作った。

● 〈ABBEY ROAD〉(1969年)
リリースは「レット・イット・ビー」の前に行われたが、グループとしてのレコーディングは、このアルバムが最後。彼らの険悪な状態も表面化せず、完成度の高い作品に仕上がっている。しかし、基本的にA面はレノンが、B面はマッカートニーがリーダーシップをとって制作された。何かと話題の多いアルバムで、アビィ・ロードで撮影されたジャケット写真をめぐって、"ポール死亡説"なる珍説まで飛び出した。収録曲は、「カム・トゥゲザー」「サムシング」「ユー・ノウ・マイ・ネーム」など。



● ビートルズの曲・アルバム